

9月3日、新宿紀伊國屋サザンシアターの「國語元年」観劇に、今回も息子の妻が招待してくれました。彼女のお母様と三人で楽しみました。本当に嬉しいプレゼントです。



かなり前にTVでこのドラマを見たことがありました。主人公は忘れましたが、重要な脇役を演じた佐藤慶の会津弁が面白く、今でも忘れられません。

明治維新と共に「全国統一の話し言葉を作ろう」という試みがなされたというのが、軸になって物語は展開していきます。一人の政府の役人がその仕事を拝命しました。幸い、その家の家族も、書生も、奉公人も、客も、居候も、様々な地方出身者で、お国ことば丸出しで生活していましたから、参考になって、便利と言えば便利。

伝統の京言葉か、権力を握った側の言葉か。はたまた、同じ物でも様々な名前がついていたり、そこにしかない物にはお国ことばで命名されていたりで選びにくい。言葉のニュアンスが伝わるか否か、用が足せるか否かの言葉の力。人口比例で語数を決めれば取捨選択が難題。武士言葉には用例集があるが幕府のもの、廓言葉は単純で統一性があって良いかもと、ドタバタが続きます。役人は試行錯誤を

重ねて苦闘します。お国ことば、訛りの何とも言えない魅力がぶつかり合って、楽しい芝居になりました。けれども忠義な主人公は統一した言葉を作ることが出来ず、狂ってしまうという悲しい結末。

日本は寺子屋などが普及し、識字率はかなり高い国でした。そのうえ、話し言葉、書き言葉の二刀流を駆使していました。文字では、漢字、平仮名、カタカナがありました。文化的に、かなり高度な国と言えるでしょう。けれども、お国ことば、方言という話し言葉は、全国ネットでは、意思の疎通が難しい時があります。さらにお国言葉を書き言葉にして使うことはあまりありません。ですから、それらをまとめる必要があったのでしょうか。そして、いわゆる武家の共通語であった、山の手言葉を標準にして、小学校教育の読本、習字の教科書を統一していったと思います。



明治大正時代

明治5年学制が發布された時、教科書は自由裁量だったそうですが、次第に届出制、認可制となり、明治18年以降は検定制になりました。国語読本として日本人の教育の最初の一步をこれでスタートさせたのです。なんととっても国語が基本です。

日本人はお国ことばと標準語のバイリンガルとなりました。私もお国を離れるにつれて、方言を上手に話せなくなりました。時々、お国ことばを聞くと懐かしさで一杯になり、気持ちとピッタリ合った言葉だという思いにさせられます。



昭和24年より

面白いことに、日本語の辞書には発音記号、アクセント記号がついていません。また、イントネーション(抑揚)もついていません。私は一度イントネーションのついていない日本語の発音辞典を借りたことがありますが、一般には使われていません。極端な例ですが、「はし」は箸、端ではイントネーションが違い、「し」を別の発音にする地方があります。従って、いまだに標準語も発音、アクセント、イントネーションはお国訛りが色濃くついて、それぞれの地方の人々が、それぞれ自分流に話しているのが実情です。現在はTVの普及のため、標準語化(?)されつつありますが…

国語、日本語は、「音」としてはかなり乱暴に、雑に扱われているような気がします。歌を聞いていて、単語のイントネーションが全く逆な音の高低で歌われていることが多く、私は「アッ！こりや〇〇訛りでねふてあったが～(なかつただろうか)」と、ニヤニヤしながら、つい言いたくなります。